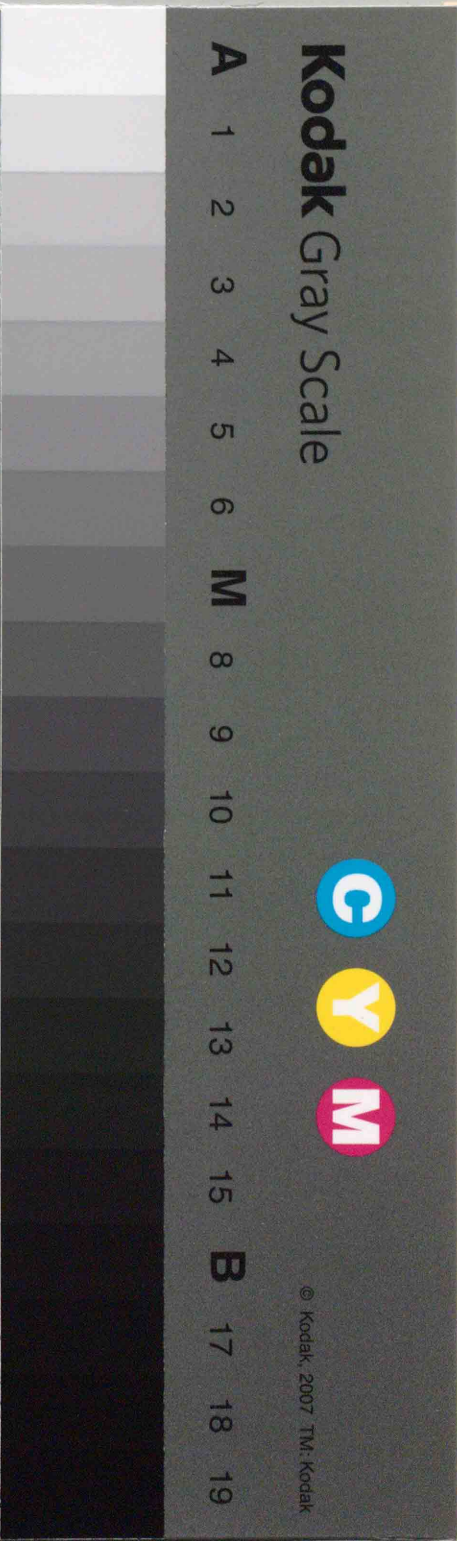
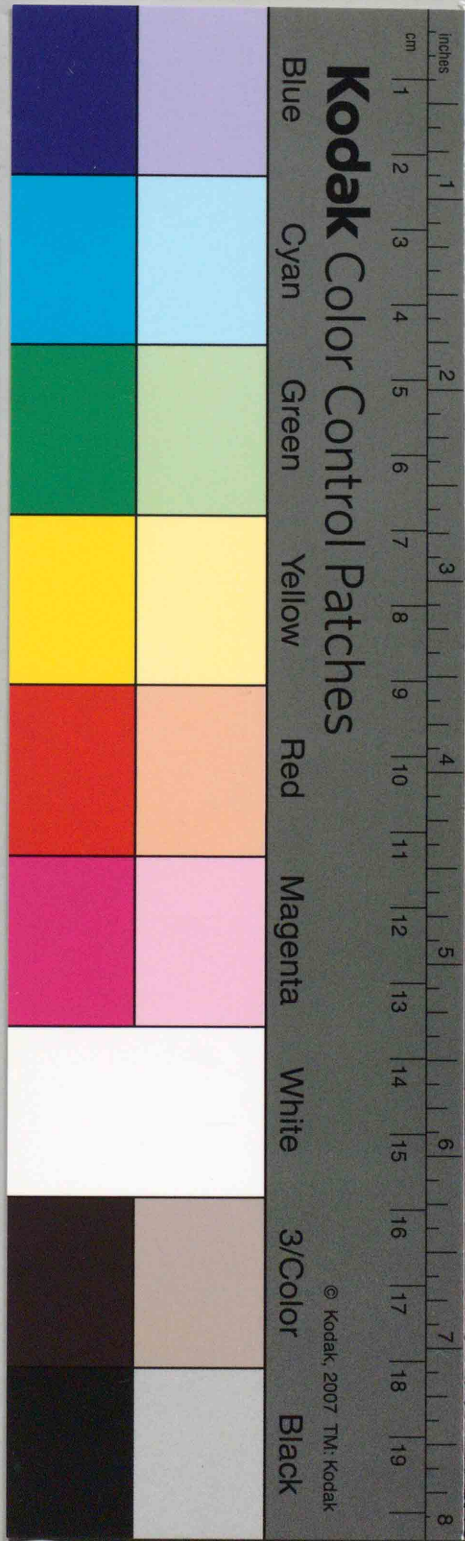
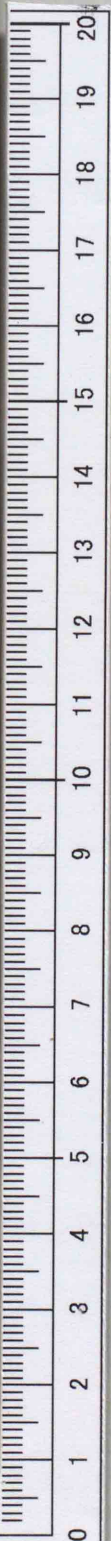


新編  
小學修身書

吉田賢輔 編  
尋常科用

一

375.9  
Y619  
資料室



30542

教科書文庫

3
110
31-1886
20003 02851



3159  
Y019

室  
料  
書  
大  
學  
書  
古

吉田賢輔 編



卷一

新編 小學修身書

東京

汎愛堂藏梓



題辭



人種改新無別法  
兒童教養要完全  
三千七百萬兄弟

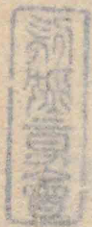
新編小學修身書序

欽進文明尚慎旃

敬宇中村正直



賤編



新編小學脩身書

凡例

- 一本編ハ、兒童ニ適切ナル、脩身ノ道ヲ講話シ、又ハ誦記スルノ便
- ニ供ス、其意思ハ、
- 一、每章始メ、古人ノ訓誨ニ據リ、其要領ヲ叙シ、次ニ内外人士ノ
- 一、美德善行ヲ録シ、終リニ賢哲ノ

新編小學

脩身書

凡例

簡易ナル格言ヲ掲グ、  
一本編ハ、兒童ヲシテ、先ヅ脩身ノ  
要領ヲ識得セシメ、次ニ善行ニ  
就キテ、其意思ヲ感化セシメ、終  
リニ格言ヲ以テ、其觀念ヲ鞏固  
ナラシメントス、  
一本編ニ、蒐録セル、嘉言善行ハ、經  
史又ハ、禱書中ヨリ抄出しテ、妄

ニ私言ヲ接ヘス、然レドモ、其兒  
童ニ理會シ難キモノハ、章ヲ斷  
テ、義ヲ取りテ、原文ヲ平易ニス、  
一每章、眼目ノ文字ハ、重圈◎ヲ附  
シ、肯綮ノ處ハ、密圈○ヲ附シ、講  
讀者ニ便ス、

明治十九年五月

編者識

陽成十八年五月  
黃香九歲記  
子雞親雞の盲となりたるを養ひ  
長衛門兄弟夫婦を父母の如くにうや

新編 小學修身書卷一

目錄

第一 孝悌

事實

○黃香九歲記、よく父につゝへ

話、

○子雞、親雞の盲となりたるを養ひ

話、

○長衛門、兄弟夫婦を父母の如くにうや

まひり話

夫教を父母の咄くすのみ

○李勣、自らかゆをにて、姉の病を、みと

り、非話、疾の首もさりとすよき養心

附格言

○第二 眞實

一、ふまへて、父に、しん、し

事實

○總兵、家ちんを、月々たごへずして、納

めたる話、

○叔通、約束を守りて、たしになりたる

女を、めとり、話、

附格言

第三 友愛

事實

○泰時、弟妹に、領地品物を、分け與へ

話、

○セ、ム、ス、七歳にして、よく弟をいさ

め、む、つ、み、合、ひ、話、

○世恩、夜々門外に、立ちて、弟の歸るを

待ちたる話

附格言

第四 正直

事實

○六平、用捨をこひい米を、多しとて、もちゆきい話、

○ジョン、幼くして、友の言を、こばみても、をとらざりい話、

附格言

第五 從順

事實

○サムボッス、よく無慈悲の主人に、たがひ仕へい話、

○林氏、夫の怒りを、心にをさめ、父母などにも、告げざりい話、

附格言

新編 小學修身書卷一 目録終

第一 附言  
 第二 附言  
 第三 附言  
 第四 附言  
 第五 附言  
 第六 附言  
 第七 附言  
 第八 附言  
 第九 附言  
 第十 附言  
 第十一 附言  
 第十二 附言  
 第十三 附言  
 第十四 附言  
 第十五 附言  
 第十六 附言  
 第十七 附言  
 第十八 附言  
 第十九 附言  
 第二十 附言  
 第二十一 附言  
 第二十二 附言  
 第二十三 附言  
 第二十四 附言  
 第二十五 附言  
 第二十六 附言  
 第二十七 附言  
 第二十八 附言  
 第二十九 附言  
 第三十 附言  
 第三十一 附言  
 第三十二 附言  
 第三十三 附言  
 第三十四 附言  
 第三十五 附言  
 第三十六 附言  
 第三十七 附言  
 第三十八 附言  
 第三十九 附言  
 第四十 附言  
 第四十一 附言  
 第四十二 附言  
 第四十三 附言  
 第四十四 附言  
 第四十五 附言  
 第四十六 附言  
 第四十七 附言  
 第四十八 附言  
 第四十九 附言  
 第五十 附言  
 第五十一 附言  
 第五十二 附言  
 第五十三 附言  
 第五十四 附言  
 第五十五 附言  
 第五十六 附言  
 第五十七 附言  
 第五十八 附言  
 第五十九 附言  
 第六十 附言  
 第六十一 附言  
 第六十二 附言  
 第六十三 附言  
 第六十四 附言  
 第六十五 附言  
 第六十六 附言  
 第六十七 附言  
 第六十八 附言  
 第六十九 附言  
 第七十 附言  
 第七十一 附言  
 第七十二 附言  
 第七十三 附言  
 第七十四 附言  
 第七十五 附言  
 第七十六 附言  
 第七十七 附言  
 第七十八 附言  
 第七十九 附言  
 第八十 附言  
 第八十一 附言  
 第八十二 附言  
 第八十三 附言  
 第八十四 附言  
 第八十五 附言  
 第八十六 附言  
 第八十七 附言  
 第八十八 附言  
 第八十九 附言  
 第九十 附言  
 第九十一 附言  
 第九十二 附言  
 第九十三 附言  
 第九十四 附言  
 第九十五 附言  
 第九十六 附言  
 第九十七 附言  
 第九十八 附言  
 第九十九 附言  
 第一百 附言

新編 小學修身書卷一

吉田賢輔 編

第一 孝悌

それ父母は、わがみのでき、いも  
 となれば、そのもとを、わするま  
 とまなり、まゝて、やゝなひそだ  
 てられ、恩たんは、やまよりたか



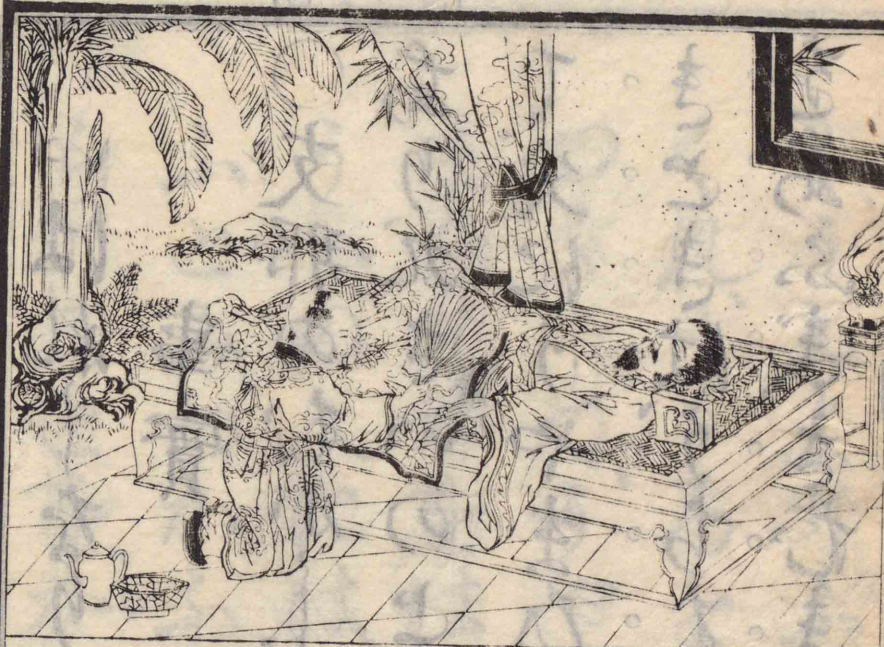
くうみよりふかす、ゆゑに、あけ  
くれ、さるをつくり、ちからを  
つくして、うやまひ、つかふべし、  
また、兄弟をば、とめ、われより、め  
うへの人には、父母につぎて、た  
ふとみ、つかふべし、古人も、これ  
らのことを、か<sup>孝</sup>うて、い<sup>悒</sup>のみちと、

いはれしなり、

事實

○支那シナのむかし、黄香クワウカウといへる人  
あり、九歳さいのとき、母をうしなひ  
て、父にうやまひ、つかへしが、あつ  
きとまきは、うちをとりて、まくら  
を、あふぎ、さむきとまきは、わがみを

黄香九歳  
にしてよ  
く父につ  
らへし話



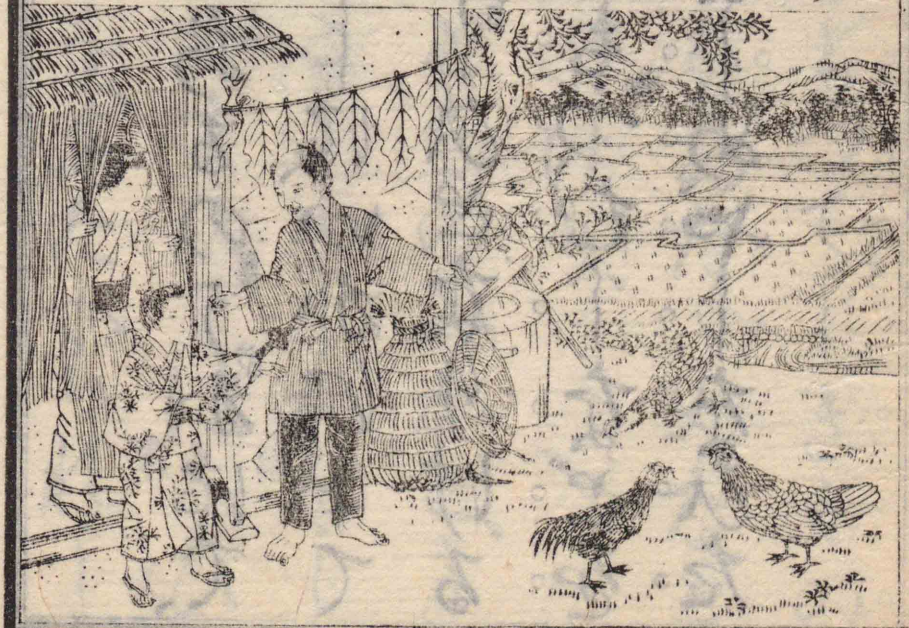
もつて、いきもの  
を、あたくめなど  
いけり、  
ときのみかどま  
こゝめ、かんじ  
たまひて、はうび  
を、あたへられ、  
寝美

子難親難  
の盲とな  
りたるを  
養ひし話

といふ

○紀伊のくにの、あるのうかにて、  
農家  
にはとりをかひに、いかにて  
かたやとりのめ、盲ひとなりける  
を、子ことりは、穀こくもつむ、物ななどを  
ひろひきて、ばまゝ、物めや、なひた  
り、

かすならぬどり  
さへかくのごと  
くなれば人たる  
ものかたどきも  
父母につかふる  
みちをたろをか  
にすべからず



長工門  
夫婦を父  
母の如く  
にうやま  
ひ話

○阿波のくにののうに長右衛門  
といへるものあり兄はからだも  
よはくしてよじたりのおざさへ  
うとければ長右衛門はほをう  
りあるきてまうけい錢を兄へわ  
たし日くこづかひをもらひおけ  
り



かくて、家業かげふ  
をむげみ、つひに  
いふはまをかひ  
もとめて、いへを  
つくり、兄夫婦と  
ろの子をすまは  
せ、自身んは、せま

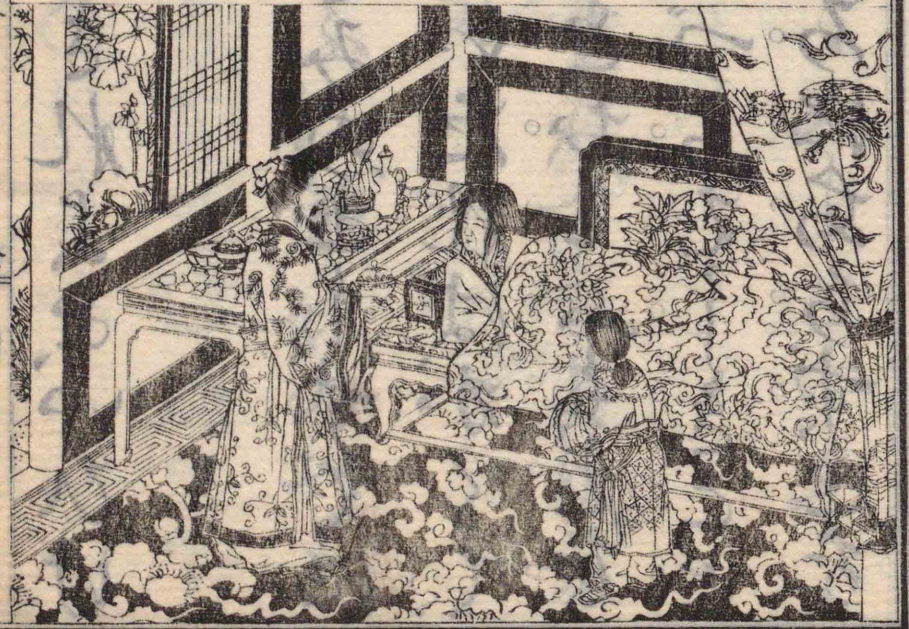
きいへにすみて、妻とともに、やと  
ひ人のごとくはたらきけり、  
すべて、くらゐかさを、兄夫婦へま  
かせたきけるに、心にかなをぬこ  
と、たかくあれど、けしきにも、あら  
をさず、たゞ父母のごとくに、うや  
まひつかへけり、

このことりやういゆへきこえも  
のねなくたまえりて夫婦のもの  
を<sup>賞</sup>やうせられといふ

李勣自ら  
かゆを以  
て姉の病  
をみとり  
一話

○唐の李勣<sup>タウ</sup>といへる人は、姉につ  
かへてまごころをつくせり、ある  
とき、姉のやまひに、あくりければ、  
勣はかゆをにんとて、火をたきけ

るに、あやまちて、  
ひげをやきけり、  
姉はみて、今はお  
んみのくらおも  
たかく、めつつか  
ひも、おなくあれ  
ば、このちは、め



中つかひに、まかされよと、いひけ  
り。また、また、また、また、  
勸ごたへて、姉ぎみのと、いすでに  
た、い、勸もまたたいたれば、かくて、  
な、かくつつかへんと、おもふも、えな  
る。ま、ちと、のど、づら、え、き、こと  
は、<sup>苦</sup>と、な、す、と、こ、ろ、に、あ、ら、ず、と、な

ほかゆをにて、す、め、といふ、

格言

○孝は、たやをやすんずるより、大  
なるは、な、楊雄

○兄、姉をうやまふは、弟、妹のつと  
めなり、省心雜言

第二、眞實

古人いはく杞のれをかざらず  
人をあざむかざるをむねとす  
又いはく人と一たびや約くそく  
したることはがならずかふる  
ことなかるべし

事實

総兵家ち  
んを月々  
たがへず  
して納め  
たる話

○筑前チクゼンのくに、べにや總兵ソウバイとい  
へるまづき人ありたながりし  
て、べにをうりあるまきろの日を杞  
くりしがつねに妻子にむかひて、  
いつといふものなからんにはの  
ド宿ゆくもなすべきなりしおるを  
いつのめぐみにて、あめつゆを



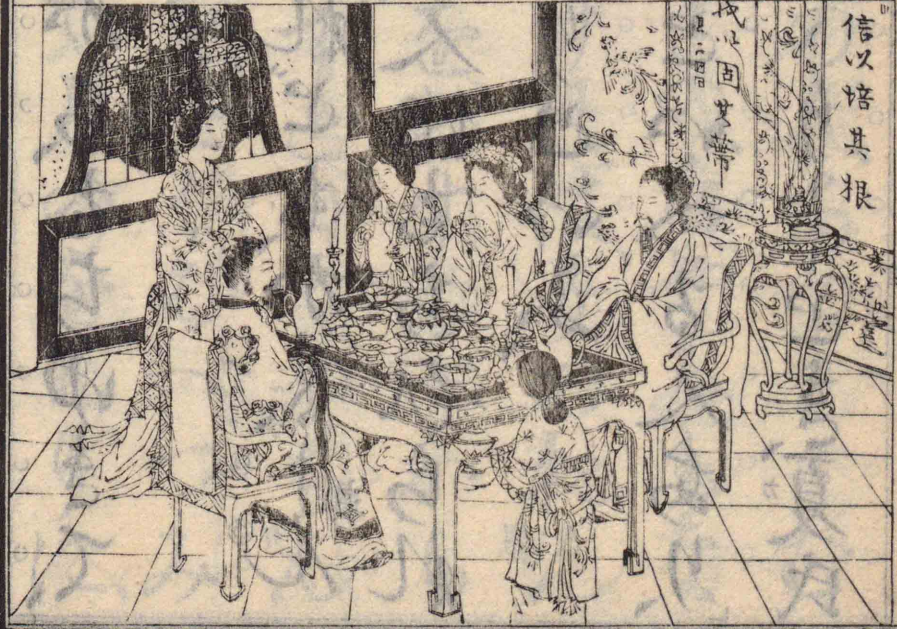
のぎあつささむ  
さのなやみもな  
ければうのねん  
をわするべから  
ずと日くやちん  
をたくむつみ  
て月のをむりに

叔通やく  
束を守り  
てねーに  
なりたる  
女をめぐ  
り話

ふそくなくみづからもちゆきて、  
をさめたりとぞ、  
いやきものなれどもかくん  
トつゆ急にのち人にもちひられ  
ていへをねこせりといふ、  
支那に鄭叔通といへる人あり、  
といふまだわか、りーとき夏氏



のむすめを、めと  
らんと、やくそく  
なみみやこにの  
ほり、い<sup>遊</sup>うがく  
てぐわん<sup>官</sup>いんと  
なり、のちぐに、  
かへりけるに、夏



信以培其根

戒以固其節

啞

氏のむすめ、やまひによりて、た  
となりたり、  
よりて、いんぞくのもの、不かのむ  
すめを、めと<sup>親</sup>るべしと、すめける  
を、叔通<sup>族</sup>まかずして、むび<sup>無</sup>やう<sup>病</sup>のと  
まにめとらん、と、やくそくせしを、  
やまひの、たこりしとて、ろむまぬ

新編小學  
介與書卷一

るは、くんじつに、あらずと、つみに  
夏氏を、めとりと、つふ、

格言

○中に、まことあれば、外にあらは  
る、大學

○眞實は、人にまごはるの、みちな  
り、五常訓

第三 友愛

○古人曰く、兄姉たるものは、常に  
弟妹を、あはれみ、たしみて、あ  
らそひ、いさかふこと、なかるべ  
し、

我より、年よたなるゆゑ、しらざ  
る事は、よくを、つあ、き事は、

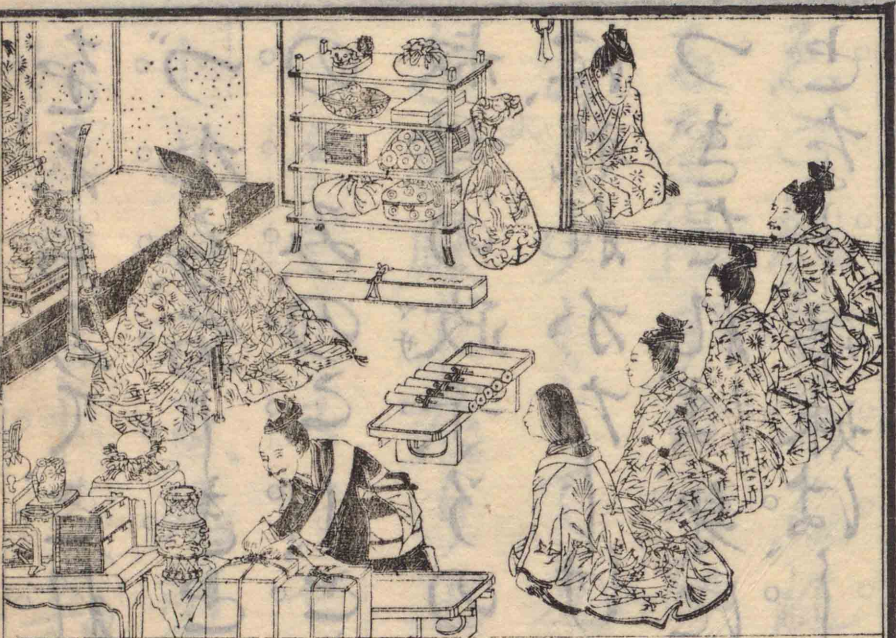
奥一  
野子  
習語  
書物

新編小學  
介與書卷一



泰時弟妹  
に領地品  
物と分け  
與へし話

いましめ、さとして、そのために  
思ふことは、なほ我がためを思  
ふごとくなすべし、これをい<sup>友</sup>う  
あ<sup>愛</sup>いといふなり、  
事實<sup>ホウデウヤストキ</sup>の、北條泰時、父の家をつぎて、かま  
くらの、<sup>執</sup>トつけんとなりしとき、弟<sup>權</sup>



八人と、妹いく人  
か、ありけるをよ  
びあつめて、父よ  
り、ゆづりうけし、  
り、やうちのよき<sup>領地</sup>  
ところと、<sup>諸</sup>よた  
うぐのよきもの<sup>道具</sup>

を、えらみて、これを分ちあたへ、みづから、あゝきと、ころと、あゝきとの、みの、こゝと、りけり、この、まもる、叔母の政子、そのゆゑを、とひけるに、我れかたづけなくも、父の家を、つぎたれば、身にたらずと、いふことなり、弟妹は、いからざる、ものゆ

ゲームス  
七歳に  
てよく第  
をいさめ  
むつみ合  
ひ一話

ゑ、これをあてれみて、あつくせざるを得ずと、いひけるに、政子、よく少くして、友愛のこゝろふかきを、感ずたりと、いふ、

○イギリスに、ゲームスと、ロベルトといへる、兄弟あり、兄は七歳、弟は五歳にして、其なか、もつとも、む

つましく、たがひに、たすけいまゝ  
 めて、少くも、いさかふ事など、なま  
 ざりき、

ある日、兄弟の野に出で、あろびけ  
 るに、たましく、小どりの、たろあけ  
 るを見て、ロベルト、なに鳥ならん  
 とおげより見るに、鳥はたどろき

たろれて、たたく  
 と、とび去りたり、  
 ロベルト、ろの處  
 つ、いたり見るに、  
 すありて、ひなの、  
 ひよく、と、なまき  
 めけるに、あいら



新編小學 卷一

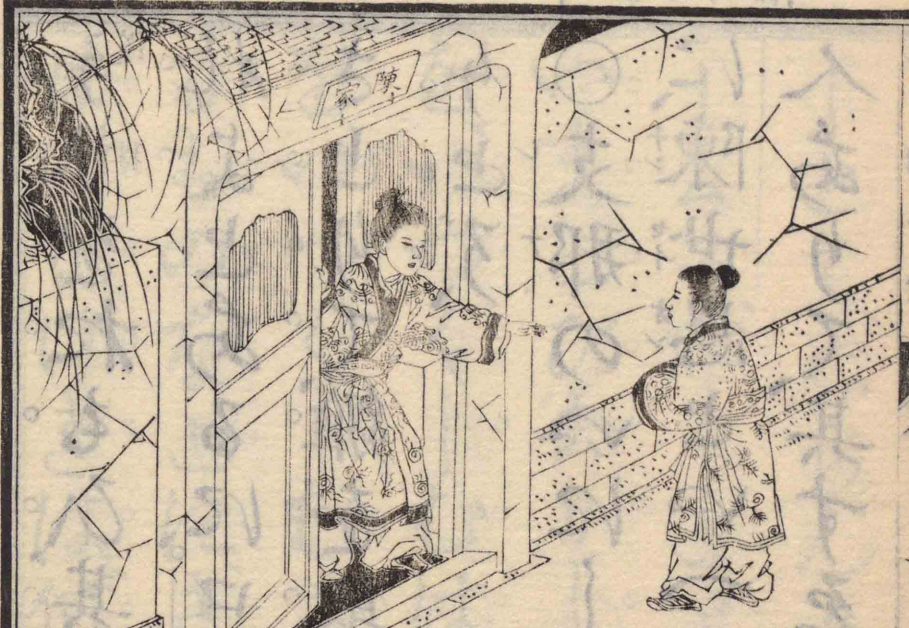
とてとらんとしけるを兄のゼ  
ムスたしとめて、  
いまとび去りしや鳥のこの雛  
をいつくしむはな不父母の我ら  
をいつくしむごとく我らもしお  
るものなごにさらされんには父  
母のなげきは何ばかりぞこのだ

世恩夜々  
門外に立  
ちて弟の  
帰るを待  
ちたる話

道理をたもひ其まゝになしれたか  
れよとあるに口ベルトげにもと  
さとりて雛を取ることをやめた  
りとぞ

○支那のいにへ夏邑といふ處  
に陳世恩といへる人あり兄弟三  
人ありて其すゑの弟は家にある

新編小學 卷一 十五



ことをきらひ朝  
よりたつ出で夜  
に至らぬ他ばか  
らずして少くも  
學問をなさぐり  
ければ世恩たび  
たびいさむれど

も一か向りき、入れずさりして、つ  
よくいひたらんには、かへつて、兄  
弟の中を、やぶるべしと、つひに、夜  
ごとに、もんのろとへ出で、弟のか  
へるを、まちて、てづから、戸を、しめ、  
さむき時は、とく入りて、あた、ま  
れよ、といひ、うゑたらん、と、ねもふ

時はとくよくされよとまご  
るもてせわしたるに弟はふかく  
感ずてつひにあらびあるく事を  
やめ家にありて學問をはげみた  
りといふ  
格言  
○兄弟は少々のいかりありとも

親みをすてば左傳

○これを親めば、その貴からん、こ  
とを欲を孟子

第四 正直六平

古人の曰く、人はかりにもうろ  
いつまりをいはず、ろをた  
だしくしてたこなひすぐなる



なり、これを志正やうぢきといふ

事實

○伊豫イヨのくに、六平といへるものあり、うけさく受作にて七斗のたをつくり、凶が一斗作きようさく作にてげみをうけ、二斗のよう用や捨を

六平用冷  
をこひ  
米や多  
とてもち  
ひき話

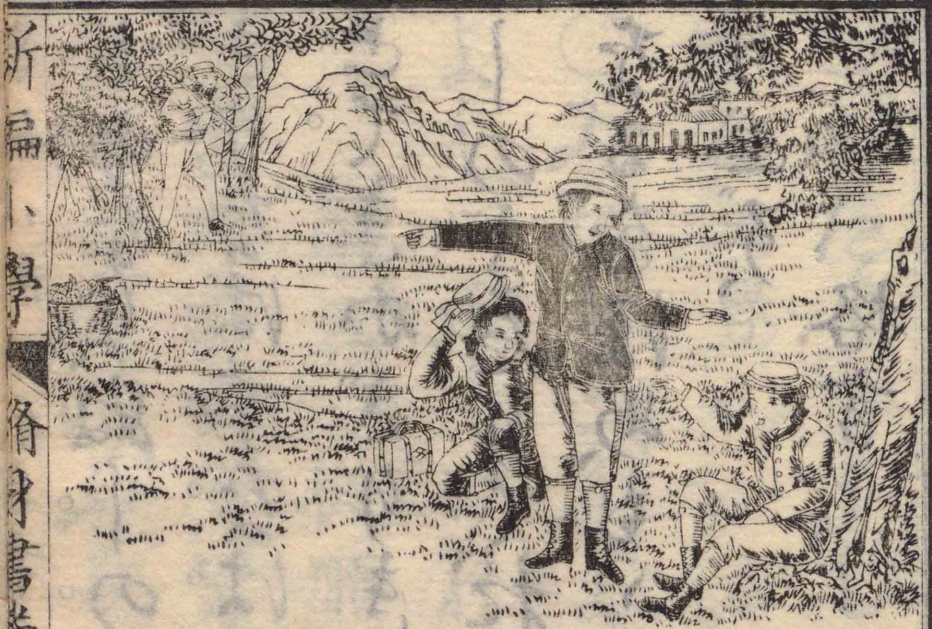
こへり、いかるに  
とりいれてはか  
りみるには、め  
たもひより、た  
不かり、かばみ  
づから、一斗たづ  
さへゆきて、ろの



ジョン幼  
くして友  
の言をこ  
ばみても  
もてさら  
ざりて話

新編小説 修身書卷一

よゝをのべ、これををさめけり。ち  
 とう、<sup>頭</sup>うの正直なるを、志やうして、  
 こめす<sup>數</sup>へうを、たまひうとぞ、  
 ○アメリカに、ジョンといつる、<sup>童</sup>ど  
 う<sup>兒</sup>あり、ある日、ともとのにいで  
 て、あうびけるに、みちのかたはら  
 にも、をいれうかごのありける



を、そのとも、ジヨ  
 ンに、一つ二つと  
 り<sup>米</sup>よといつり、  
 ジョンかいらを  
 ぶりて、たとひい  
 さかものな  
 りとも、これ人の

新編小説 修身書卷一

ものなりぬへのおざるとてとり  
さりなばすなはちぬすびとなり  
とてきかざりきたましくもぬ  
一のきたりてねほいにその正直  
なるをほめもねなくあたへた  
りどろ

格言

○心たぐいしうしてのちに身をさ  
まる大學

○みなもとまよければながれま  
よし心正しければ事正し讀書錄

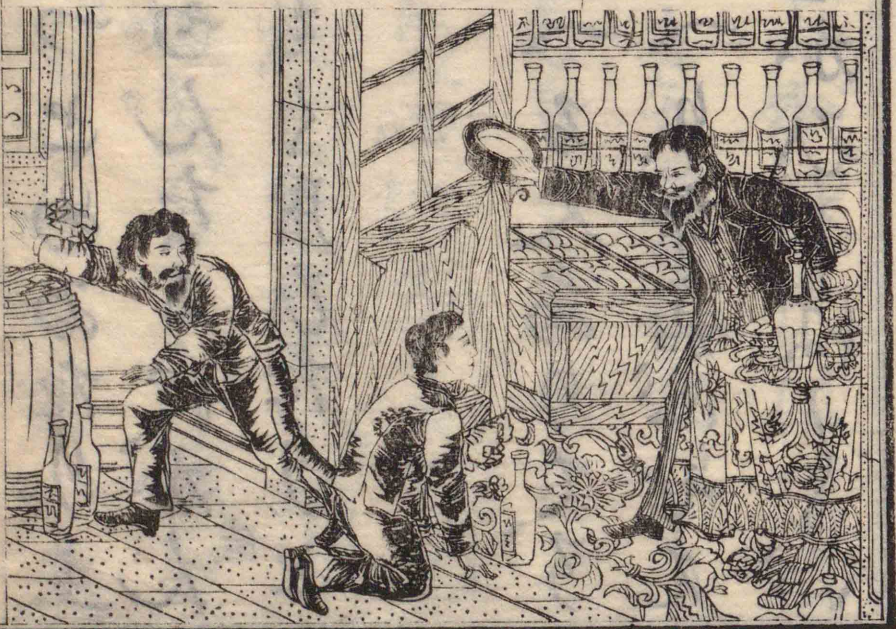
第五 從順

古人の曰く男女とも凡て物や  
はらかにふるまひてその家の

サムボツ  
よく無慈  
悲の主人  
に、たが  
ひ仕一  
話

主人などに、事ふるにも、決して  
 さからひ、うむくことなかるべ  
 し。之を<sup>◎</sup>お<sup>◎</sup>う<sup>◎</sup>お<sup>◎</sup>ん<sup>◎</sup>といふなり、  
 事實<sup>従</sup> <sup>順</sup> <sup>館</sup>  
 ○アメリカのある商<sup>館</sup>わんに、サ  
 ムボツといへる、やとひ人あり、主  
 人は、まをめて、むごき生れつきに

て、人を使ふには  
 なをだ<sup>無慈悲</sup>む<sup>無慈悲</sup>びな  
 りきざれど、サム  
 ボツは、主人のむ  
 ドひを人にかた  
 りしことなく、ひ  
 たすら、その心を



新編小説 介身書卷一

世

やすむるやうにつとめおたり、主人の志ゆう志おんななるにかん  
トてつひに、たもく用ひたりと  
いふ、お主人の心

林氏夫の怒りを心にさめ、父母をどにも告げざりし語

○唐タウに、李嘉カといへる人ありて、その妻を、林氏シといへり、李嘉心せえしくして、妻にむかひ、ばくくい

かりをあらをしくしが、林氏はすこしもうらむけしきなく、いよく従順のみちをまもりて、父母などにも、告げず、ひとりに心をさめおこはば、李嘉のねこなひに、感て、二た、び前の如きふるまひをせず、永くむつみくらせりといふ

新編小學修身書卷一

格言

○問ふことをこのみてみづから

用ふることをにくむ畜徳録

○人の我にむくとも我は人に

むくなかれ陸宣公

菱江浄書

新編 小學修身書卷一終

修身書

明治十九年七月十五日版權免許  
同 十月 出版

東京府士族

吉田賢輔

下谷區下谷竹町  
十番地

東京府平民

阪上 半七

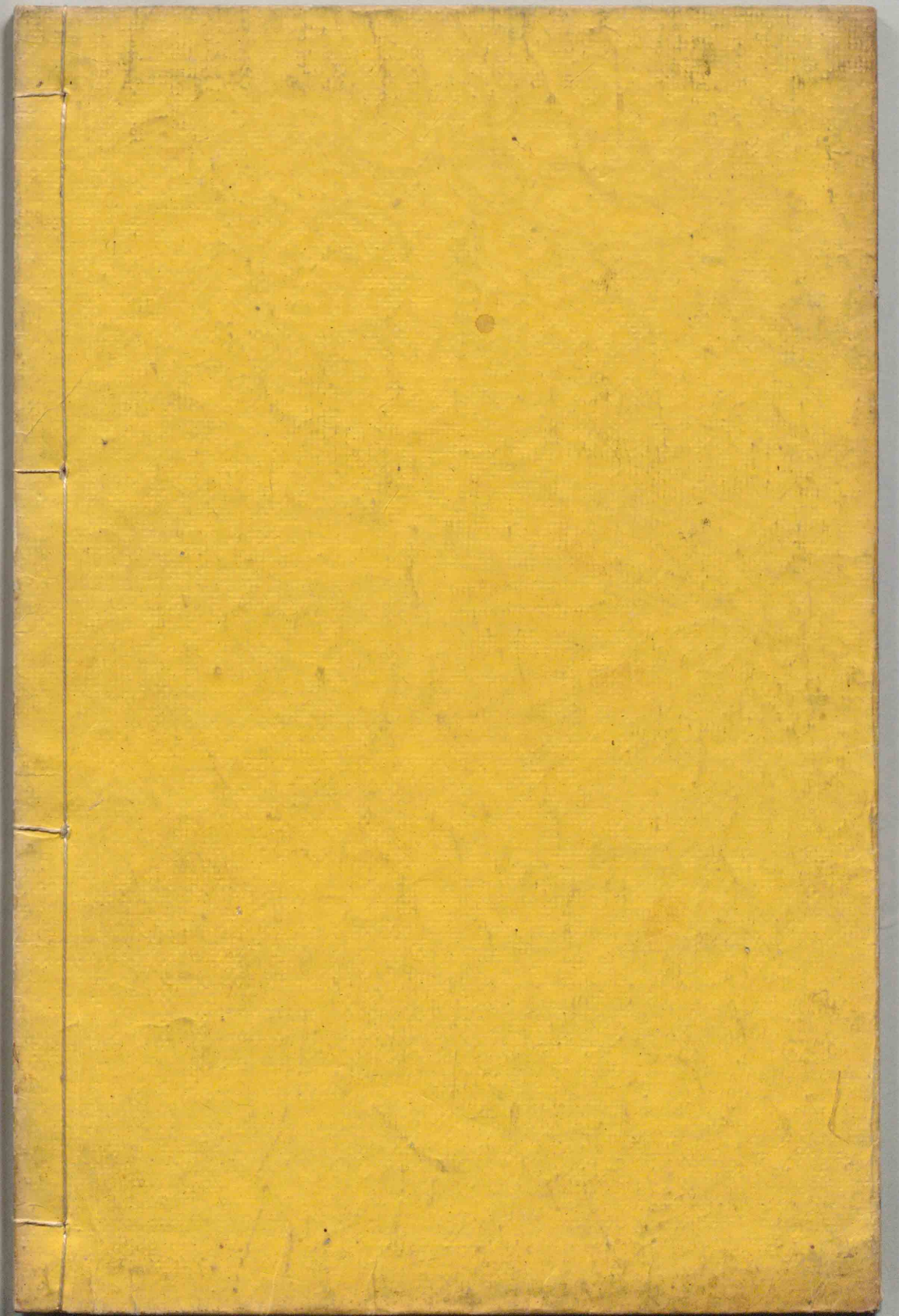
日本橋區本石町  
十軒店六番地

出版人

編者



定價金八錢五厘



吉田賢輔編

卷一

新編小學脩身書

東京

汎愛堂藏梓





融齋小學節身書

融齋主人